

蓮如上人「御文」の文章

—文章史の観点から—

はじめに

すでに言いふるされたことであるが、中古の仮名の物語や、仮名の日記の「ことば」は当時の口語（日常会話語）を反映したものであって、その文章は言文一致の文章であったとせられている。^①ただ、その場合、文字に書かれたことば（書きことば）と口頭のことば（話しことば）とは、「凡そ言語の歴史の存する限り、常にその全き一致を見ることは望み得ないもの」（国語学会編「国語の歴史」一一三頁）であるから、言文一致の文といってもそれが直ちに口頭の話しことばと同じであるということにはならないが、少なくとも平安末期以後の（「御文」は室町時代）、いわゆる「文

片岡了

語」と「口語」の間の差のようなことはなかった。が、それも源氏物語の頃を頂点として、それ以後は次第に「文章語」と「口頭語」とが離れて行ったと考えられている。また、ことを文章の形式に限っても、一般に文体論、あるいは文章史の上で、源氏物語以前の仮名文学をとりあげる時、それらの頃にはまだ十分に、和文の書きことばの文体が確立しておらず、規範とすべき和文の文章体が成立していなかったために、和文を書く上にも話しことばが規範として作用した結果、そこに書かれた仮名文も基本的に話しことばの形式をもったのだということがいわれる。^②それではそれより後の文章は、文章の形式において、それらとは相当地に異質なのであるうか。そのような関心から、ここに、

「抄物」や「狂言」の詞章と並んで、中世語を考える時の資料として国語史の上で問題にせられることのある「仮名の法語」の一つである蓮如上人（以下敬称略）の「御文」の文章のあり方をとりあげてみたい。

「御文」は、最も早いものは寛正二年（一四六一）にかかれていたが、大部分は文明年間（一四六九—一八九）から明応年間（一四九二—一五〇〇）にかけて書かれている。その現在伝わるものは、総数二百六十通余であり、それらの中には、全く個人的必要をもつてある特定個人宛にかかれた私信もあるが、いまここではそのうち、蓮如の歿後五十年程の間に、その子実如（一五二五歿）、曾孫証如（一五五四歿）の手によって編集、開板せられた「五帖御文」八十通を中心にする。この八十通の「御文」は、不特定多数（地方の門侶集団）にあてたもので、その内容は周知の通り、一種の法語である。それは文書によって教化、伝導を目ざしたもので、文字による「法話（説教）」とでもいうべきものである。かかる内容をもった消息はひとり蓮如にかぎったことではなく、すでに親鸞や日蓮などにもその例があるが、蓮如の「御文」はそれらの中でも特に注意すべき性格をもっている。親鸞や日蓮のそれはいまだ多少とも個人的書簡の性格をそなえているが、蓮如の「御文」の大部分

（ことにいまとりあげようとしている「五帖御文」の中のものは）個人的必要から出た書簡ではなくて、「法話」である。一通一通がそれだけで教義の最も肝要な点をつくしていて、いわば真宗教義の要論というような性格をそなえているのである。その結果、類似の内容をもつ「御文」が数多くあることになるのである。そしてここで、特に注意しなければならぬのは、「御文」の受容の形式である。

「御文」は目で「読む」ものとしてではなく、不特定多数の門侶が「聴く」ものとして製作せられているのである。そのことはすでに指摘せられていることでもあるが、^⑤なお次のような記録、即ち「蓮如上人御一代記聞書」の

蓮如上人、堺の御坊に御座の時、……御堂において卓の上に御文ををかせられて、一人二人乃至五人十人参られ候人々に対し、御文をよませられ候。其夜、蓮如上人御物語の時、仰られ候。此間、面白き事を思出候。常に御文を一人なりとも来らん人にもよませてきかせば、有縁の人は信をとるべし。云々（第二七九条）とか、

（坊主が）御文をよみて人に聴聞させんとも、報酬と存ずべし。云々（第二〇九条）
あるいは、

仏恩がたふとく候などと申は聞きにくく候。聊爾なり……御文がと申すも聊爾なり。御文を聴聞申て、御文有難と申てよき由に候。云々(第二六〇条)

また

御文のこと。聖教はよみちがへもあり。こころえもゆかぬところもあり。御文はよみちがへもあるまじきとおほせられさふらふ。御慈悲のきはまりなり、これをききながら、こころえのゆかぬは……(第五四条)

そして、「御文」(文明五年二月八日)そのものの中の

……コレヨリノチハ、心中ニココロエヲカルベキ次第ヲクハシク申スベシ。ヨクヨク、ミミラソバダテ、聴聞アルベシ。……(一ノ五)

などによつても推察することができる。

このように、受容者(不特定多数の門侶)は、ごく限られた側近の者や、宗団の統率者(坊主)を除いて、一般には、目で読むのではなく、「聴聞」するのである。その場合、その「読み聴かせる」役は、右の記事からもわかるように、蓮如自身のこともあるが、普通は一地方宗団の統率者(坊主)である。そして読み手が蓮如でない場合も、「聴き手」はそこに蓮如自身の声音に接すると同じ心持をもつて、「聴く」のである。したがってそこには「読むの

を聴く」というよりも、むしろ、直接蓮如から「法話を聴く」というに等しい「場」のあり方が形成せられることになる。「御文」はその様な受容の形式を考慮に入れて製作せられていると見られるのである。

そこで右のような性格をもつ「御文」の文章のあり方がどのようなものであるかということについて、文章史の観点から検討してみたいと思う。

ちなみに、「御文」は真宗関係ばかりではなく、かなり一般に浸透して居たと考えられる。例えば江戸時代の俳人各務支考の「本朝文鑑」書状の部に「御文」を引用し「何ノ子細モナク安心ノ二字ヲ操リ返シタマフハ般若六百卷ノ叮嚀ニモ勝リテ、無智ノ輩ハ爰ニ了解スベシ。……此等ノ詞ヲ文鑑トハ見ルベシ」と述べている。支考は九才から十九才まで僧籍にあったが、それは臨濟宗の禅寺であった。真宗とは異質の宗派であるにもかかわらず、「御文」について述べているということは、「御文」の浸透がかなり広範であったことを示すといえよう。また、明治の福沢諭吉が、「御文」を暗記していて達意的な文章の手法にしたことは周知の通りである。^⑧

拙稿に使用した底本は次の通りである。

御文 「真蹟玻璃版・御文」(禿氏祐祥編)、「五帖

御文定本」(稲葉昌丸編)・「校註蓮如上人御
文全集」(禿氏祐祥編)・「蓮如上人遺文」

(稲葉昌丸編)

親鸞消息

「親鸞集」

(多屋頼俊編「日本古典文学

大系」八十二卷)

日蓮消息

「日蓮集」

(新聞進一編「日本古典文学

大系」八十二卷)

(一) 文の長さ

はじめに文の長さについて見るが、この場合、「五帖御文」の配列には一定の規則性・傾向は認められないから、五帖の各々から第一通目と最後の一通の二通をとり出し、合計十通について調査する。「五帖御文」は全体で八十通あるから、八分の一の標本を抽出したことになる。尚、各通末尾の「ア ナカシヨ」及び、日付などは問題にしない)

文の長さは音節数で算出した。その場合、音読するか訓読するかは、「五帖御文」のよみ方に従う。蓮如の真蹟では仮名はつけられていないが、五帖に編集せられた時(蓮如歿後五十年程の間になされた。前述)、読み仮名がつけられた。それは、当時伝承せられていた読み方に従っていると思われるので、今はそれに従った。文節数、語数で算出す

ることも考えられるが、それには此の場合、次のような障害がある。たとえば「コノ信ヲエタルクラキヲ、経ニハ即得往生住不退転トトキ」(二ノ二)の「即得往生住不退転」の如きものの文節数、語数を考えたとすれば、読み下し文にして調査せねばならないが、真蹟では訓点がつけられていないし、「五帖御文」では音読の字音仮名が附されているから、おそらく蓮如自身も全体を一つづきに音読して扱っているかと認められる。したがって、読み下し文にして文節数、語数をかぞえることは必ずしも原文の記述態度にそっているとは言い難い。さらにもしこれを読み下し文にして文節、語数を算出するとすれば「コレスナハチ謗法闡提廻心皆往ノ御釈ニモアヒカナヒ、マタ自信教人信ノ義ニモ相応スベキモノカ」における「謗法」、「廻心皆往」、「自信教人信」の如きものも読み下し文の形にして文節数をかぞえねばならなくなる。しかしこれらは明らかに一つの単位として、いわば熟語的に扱われていると認めるべきであるから、これを読み下しの形にするのは妥当でない。そこで今は音節数で算出することにした。これは比較のために出した親鸞や日蓮の場合も同様である。次に各通全文の平均音節数を示す。

「御文」の番号	各通の文の総数	各文平均音節数
1 の 1	22	47.0
1 の 15	26	45.7
2 の 1	21	56.9
2 の 15	16	66.4
3 の 1	12	86.3
3 の 13	5	144.0
4 の 1	22	55.5
4 の 15	14	65.9
5 の 1	3	74.0
5 の 22	10	64.5
総 平 均		70.6

右の通りである。ここで、類似の性格をもつものとして、親鸞及び日蓮の消息と比較して見る。親鸞の場合は、真筆の伝わる消息五通（岩波古典大系本第二・七・十一・十三・十六通目）の文長の平均は五一・三となつて「御文」のそれとの間には平均二十音節程の差がある。また日蓮の場合は、五通（富木尼御前御書、寺泊御書、千日尼御前御書、土籠御書、佐渡御書）で、平均四一・二となつて、「御文」のそれとの間に三十音節程の差がある。この程度の調査では確実なことはいえないが、しかし、大体の

傾向として、「御文」の文がこれらの消息類の中では長い方に属するものであることは認められる。

例えば次のようである。まず短い例を示すと、

夫、人間ノ浮生ナル相ヲツラツラ観ズルニ、オホヨソハカナキモノハ、コノ世ノ始中終、マボロシノゴトクナル一期ナリ。サレバ、イマダ、万歳ノ人身ヲウケタリトイフコトヲキカズ。一生スギヤスシ。イマニイタリテタレカ百年ノ形骸ヲタモツベキヤ。我ヤサキ、人ヤサキ。ケフトモシラズ、アストモシラズ。(五ノ一六)(六文より成る)

の如くであるが、長いものは、

サレバ、チカゴロハ大坊主分ノヒトモ、ワレハ一流ノ安心ノ次第ヲシラズ、タマタマ弟子ノナカニ信心ノ沙汰スル在所ヘユキテ聴聞シ候ヒトヲバ、コトノホカ説諫ヲクハヘ候テ、或ハナカラタガヒナンドセラレ候アヒダ、坊主モシカジカト信心ノ一理ヲモ聴聞セズ、マタ弟子ヲバカヤウニアヒササヘ候アヒダ、ワレモ信心決定セズ、弟子モ信心決定セズシテ、一生ハムナシクスギユクヤウニ候コト、マコトニ自損損他ノトガノガレガタク候。(一ノ二)(全体で一文)

サテ撰取トイフハイカナルコロゾトイヘバ、コノ光

明ノ縁ニアヒタテマツレバ、罪障コトゴトク消滅スルニヨリテ、ヤガテ衆生ヲコノ光明ノウチニオサメヲカルルニヨリテ撰取トハマウスナリ。コノユヘニ阿弥陀仏ニハ撰取ト光明トノフタツツモテ肝要トセラルルナリトキコエタリ。サレバ一念帰命ノ信心ノサダマルトイフモ、コノ撰取ノ光明ニアヒタテマツル時尅ヲサシテ信心ノサダマルトハマウスナリ。(三ノ二)(三文)

の如くである。ことに極端なのは、先に表示はしなかったが、第一帖第七通目で、これはその中に会話を含むが、その会話を「……マウシケルハ……」、「……トカタリ……」、「……トテ……」の型ではさんで、全文が一つにつづいている。会話を除いても一八三音節あるが、それを含めると、全体一一七九音節が一つづきということになっている。かくのごときは例外であるが、しかし全体として、前述の如く親鸞や日蓮の消息にくらべると長い方であることは認められる。

さて、一般に文が長い程難解になると言われている。しかし「御文」は、蓮如自身が

聖教はよみちがへもあり、こころもゆかぬところもあり、御文はよみちがへもあるまじ云々(『一代記聞書』)

第五四条)

といっていることから、平易明瞭であることを基本方針として綴られたはずであると考えられる。そして事実、特殊な仏教用語や古語(室町時代語も含めて)などを註すれば(これらの語は吾々と当時の聴手との間の差である)、他はよんでみて、決して難解ではない。むしろ平易であるといえる。文は長い程難解になるといっても、実はそれは、連用修飾、連体修飾の語句がクローズになっているものことであって、重文の構成になっているものことではないようである^⑧。そこで次に文の構造について考えてみよう。

(二) 文の構造

文を長くしている構文の型としては次のようなものがあげられる。

(1) コレニヨリテ、一心一向ニ弥陀一仏ノ悲願ニ帰シテ、

フカクタノミタテマツリテ、モロモロノ雑行ヲ修スル心ヲステ、又諸神諸仏ニ追従マウス心ヲモミナウチステ、サテ、弥陀如来ト申ハ、カカル我ラゴトキノアサマシキ女人ノタメニヲコシタマヘル本願ナレバ、マコトニ仏智ノ不思議ト信ジテ、我身ハワロキイタヅラモノナリトオモヒツメテ、フカク如来ニ帰入スル心ヲモツベシ……(二ノ二)

(2)

カカルアサマシキ罪業ニノミ朝夕マドヒヌルワレラゴ
トキノイタヅラモノヲ、タスケントチカヒマシマス弥
陀如来ノ本願ニテマシマスゾトフカク信ジテ、一心ニ
フタゴコロナク、弥陀一仏ノ悲願ニスガリテ、タスケ
マシマセトオモフココロノ一念ノ信マトナレバ、カナ
ラズ如来ノ御タスケニアヅカルモノナリ……(一ノ

三)

即ち(1)はその基本的構造が接統助詞や連用中止法などに
よってつながれる重文の構成の文であり、(2)はその一部に
重文的な構成の所もあるが、それよりも修飾句が長いこと
によって長文化した文である。先に長文の例としてかかげ
た第一帖目第一通の例からもうかがわれるが、「御文」の
長文の構造において、多いのは右のうちの(1)のような構造
である。その結果、文が長くてもさほど難解にはなってい
ないのである。そしてここでさらに注意されるのは、これ
ら(1)・(2)のいずれにおいても、同じような内容のことガラ
が、くり返しのべられることである。小論でとりあげたい
と思うのは、それらを含めて、以下にかかげるようなあり
方の文である。

(三) 話語的表現

「御文」の文章には前項にのべた様な意味での構文(重
文、複文というような)とは別に、以下にかかげるような形
式の表現が非常に目立って認められる。

(a) 反復表現

これは、同じ語句が重複したり、類似の表現がくり返さ
れるものである。例えば、

サテコノウヘニハ、ネテモサメテモ、タテモ牛テモ、
南無阿弥陀仏トマウス念仏ハ、弥陀ニハヤタスケラレ
マイラセツルカタジケナサノ弥陀ノ御恩ヲ南無阿弥陀
仏トトナヘテ報ジマウス念仏ナリトココロウベキナ
リ。云々(二ノ七)

大経ニハ、易往而無人トコレヲトカレタリ。コノ文ノ
ココロハ、安心ヲトリテ弥陀ヲ一向ニタノメバ浄土ヘ
ハマイリヤスケレドモ、信心ヲトルヒトマレナレバ浄
土ヘハユキススキシテヒトナシトイヘルハコノ経文ノ
ココロナリ。(二ノ七)

一念帰命ノ信心ノサダマルトイフモ、コノ撰取ノ光明
ニアヒタマツル時尅ヲサシテ信心ノサダマルトハマ
ウスナリ。(三ノ一)

このような例は八十通の「御文」の中に百余箇所見られるが、非常に目立つ特徴の一つである。このような文構造である結果、読む文として非常にくどくどしいものになっているが、しかし、ここに冒頭に記した「聴かせる文」としての配慮が現われていると考えられるのである。

(b) 逸れ

次に目立つのはいわゆる「逸れ」の形である。例えば、
末代コノコロノ衆生ハ、機根最劣ニシテ、如説ニ修行セ
ンヒトマレナル時節ナリ。(三ノ二)

(念仏をとなえれば弥陀仏が摂取する) コノコロノ
ヲ信心ヲエタルヒトハマウスナリ。(一ノ七)

ソモソモ信心トイフハ、阿弥陀仏ノ本願ノイハレヲヨク
分別シテ一心ニ弥陀ニ帰命スルカタヲモテ、他力ノ安
心ヲ決定ストハマウスナリ。(三ノ七)

ココニ弥陀如来ノ他力本願トイフハ、イマノ世ニヲヒテ
カカルトキノ衆生ヲムネトタスケスクハンガタメニ五
劫ガアヒダコレヲ思惟シ(四十八願をたて)ソノ願ス
デニ成就シテ阿弥陀トナラセタマヘルホトケナリ。

(三ノ二)

(未安心の)ヒトハ、イカデカワガ聖人ノ御意ニハア
ヒカナヒガタシ。(三ノ九)

のごときものである。この様な形は全体で五十余ある。冒頭における表現意図が途中から別の更に強い関心に引きずられて変ってしまった形である。

(c) 欠尾表現

また(b)に類似のものではあるがそれとはまたことなる「結尾を欠く表現」がある。

(寺へ参つても不信心の者もいる。それは)モテノホ
カノ大事ナリ。ソノユヘハ、信心ヲ決定セズハ、今度
ノ報土ノ往生ハ不定ナリ。サレバ、不信ノヒトモスミ
ヤカニ決定ノコロヲトルベシ。人間ハ不定ノサカヒ
ナリ。極楽ハ常住ノ国ナリ。云々(五ノ二)

(蓮如が文明三年に吉崎に住みはじめ)ハヤ三年ノ春
秋ハタクリケリ。サルホドニ道俗男女群集セシムトイ
ヘドモ、サラニナニヘントモナキ躰ナルアヒダ当年ヨ
リ諸人ノ出入ヲトドムルコロハ、コノ在所ニ居住セ
シムル根元ハナニゴトゾナレバ、ソモソモ人界ノ生ヲ
ウケテアヒガキ仏法ニスデニアヘル身ガ、イタヅラ
ニムナシク捺落ニシヅマンハ、マコトニモテアサマシ
キコトニハアラズヤ。シカルアヒダ念仏ノ信ヲ決定シ
テ極楽ノ往生ヲトゲントオモハザランヒトビトハナニ
シニコノ在所へ来集センコトカナフベカラザルヨシノ

成敗ラクハヘヲハリス。(一ノ八)

の様なものであって、「ユヘハ」「ナニゴトゾナレバ」に対する「……ナレバナリ」というような「結び」を欠くのである。この様な例が四十余見られる。

これら(a)・(b)・(c)のごとき表現は一般に不整表現といわれるものであるが、このような表現が、「五帖御文」八十通の中に合計二百文余り存在する。「御文」の一通に含まれる文の数は平均十五程であるから、八十通で約一二〇〇文となる。そのうち、二百文余、すなわち大体六分の一、約一七パーセントがこのような不整表現である。構文における一つの特徴になっていると認められる。

さて、このような不整表現についてはどのように考えるべきであろうか。それを問題にする場合、直ちに想起せられるのは、「話しことば」(少なくとも、現代語の「話しことば」において)に特徴的な次のような構造である。例えば、

今わが国における最も重大な仕事は、民主主義の危殆に瀕しつつある事をこれを挽回し、そうして国民の生活の安定を保証し、外は外交にむかつて国威を発揚するようなことが、最も大切な事であらうと思うのであります。(国立国語研究所報告23「話しことばの文型」(2)二

四頁)

とか、

ここに一つ政治を通じてぜひともなされなければならないことは、現在これらの闘争をあえて起こしていくような、また起こさせるような今日の社会制度そのものに、大きな欠陥があるといわなければならないのでございます。(同前)

のごきとものである。「話しことば」がすべてこういう構造なのではないこと勿論であるが、しかし「書きことば」と「話しことば」とを比較した場合、右のような構造は、「話しことば」に特徴的な構造であるということは容易に観察せられるところである。かつて、伊佐早敦氏が、

「はなしことば序」(国語・国文第二十二巻三号)において

「話言葉には、言ひまはしの点で、いはば

・ひずみのある表現

・不足な表現

・過剰な表現

がみられる。」

と指摘せられたことがある。少なくとも現代の「書きことば」においては、吾々は推敲を加えることによって、このような形を避けている。そのように考えると、右のべたような構造は、「話しことば」の世界のものだということ

は許されるであらう。そして、いま「御文」の前述の如き不整表現はちやうどこういう「話しことば」(少くとも現代の)的な様相に近いものと認められるのである。

さて、文におけるこのような構造は、いわば推敲を経ない「生(なま)のまま」の表現というようになるが、しかし「御文」は決して口述の筆記ではない。多くの場合、あらかじめ草稿を作り、それを清書して門侶に送ったものであることが明らかにせられている^⑧。そうすれば、その間に整理の手を加えることはあつたはずである。事実、禿氏祐伴氏編「真蹟玻璃版『御文』」所収の真筆のうち、草稿本といわれるものを見ると、字句に修正を加えている(同書第三・四・五・六・九通目など)。とすれば、前記のような不整表現はなぜ生じたのであるか。これについては、すくなくとも次のことは認めねばならない。即ち、右の状況は決して不注意に起つたものではないということである。そうでなければ、清書の際に整理せられるはずだからである。

しかし、ここで吾々は次のような記述に注意したい。即ち、蓮崇所写本の「御文」(十四通を集録したもの)に添えられた、蓮如真筆の「端書」にある文である。そこに、

右、斯文どもは、文明第三之比より同き第五之秋の時分まで、天性こころにうかむままに、何の分別もな

く、連々に筆をそめおきつる文どもなり。さだめて文体的おかしきこともありぬべし、またことばなんどのつづかぬこともあるべし。かたがたしかるべからざるあひだ、その斟酌をなすといへども、すでにこの一帖の料紙をこしらへて書写せしむるあひだ、ちからなくまづゆなしおくものなり。云々(稲葉昌丸編「蓮如上人遺文」二七頁による)

とある。これは必ずしも、全くの謙遜の辞とばかりはいえないであらう。ことに後半「料紙云々」は事実を伝えているであらう。そう考えてみると、「御文」の文は「天性、こころにうかむまま」を、かくべつ整理の手をほどこさずに、書きつけていつて出来あがつたと見る方が事実に近いようである。そこで先の草稿本になされた修正箇所をみると、その加筆は語句にとどまって、文章には及んでいない。ということは、「御文」の文が、いわゆる「書きことば」として、整理せられたものではなく頭から流れ出るままに文字にしたに近いものであるということを物語るものと思われる。そこからまた「御文」の文が「話しことば」のあり方に似ていると考えることができる。

もっとも、こういう構造の文は「御文」にかぎったわけではない。例えば、

然ればにや、此貧女成仏して、須弥燈光如来と申すは、此貧女の事なり。(流布本「曾我物語」卷十一)

のごとき反復の例があるし、さらには佐伯梅友博士が「上代国語法研究」において「筆のそれ」として指摘しておられる数々の例もある。(同書四六頁～五六頁)ただ、それらの分量について自分は調査をしていないので、発言することはさしひかえたいが、少なくとも「御文」においては八十通のうち右の(a)・(b)・(c)の如き表現のどれをも全く持たないのは、わずかに六通であり、他は必ず(a)・(b)・(c)のいずれか、或は二種類以上を一～四箇所持っており、また前述のごとく、文数の比率からいうと、一七%がこのような構造であるから、これを表現上の一つの特性として提起することは許されるであろう。そして、このような表現によって文が難解になっているかというところは認められないのである。ことに、読まれたのを「聴く」という受容の形式においては、その反復や逸れが、理解をさまたげることになっていない。「話しことばの文型(2)」の中で、大石初太郎氏が、

長い文の場合、時に首尾の照応を欠く構造が、かえってわかりよさを助けることさえある。受け手の行動もひとしく時間性のものであるので、時間性の制約にも

とづいたある種の不整が、受け手にとっても自然のもの、受け入れやすいものであることがあるのである。

(同書二五頁～二六頁)

と述べておられるような事情がいまの場合も考えられるのである。^⑥

以上、文構造の上で、特に目立つ不整表現について、「話しことば」的なあり方としてとらえて来たのであるが、「話しことば」的という視点から、全体を眺めると、実は右の他にも、次のような表現のあることに気づく。

(b) 代名詞の挿入

例えば、

五道六道トイヘル悪趣ニスデニオモムクベキミチヲ。弥陀如来ノ願力ノ不思議トシテコレヲフサギタマフナリ
(二ノ四)

諸仏ノ悲願ニ弥陀ノ本願ノスグレマシマルソノイハレヲクハシクタグズルニ云々(三ノ五)

コレニヨリテ当流安心ノソノスガタヲアラハサバ、スナハチ……(三ノ八)

自余ノ万善万行ヲバステニ雑行トナヅケテキラヘルソノココロハイカンゾナレバ(二ノ九)

諸仏ノ悲願ニ弥陀ノ本願ノスグレマシマルソノイ

ハレヲクハシクタグヌルニ……(三ノ五)

コレニヨリテ当流安心ノソノスガタヲアラハサバ……

(三ノ八)

弥陀如来ノ我ラガ往生ヲヤスクサダメ給ヘルソノ御ウ
レシサノ御恩ヲ報ジ……(二ノ一)

(神明は) 信モナキ衆生ノムナシク地獄ニオチンコト
ヲカナシミオボシメシテコレヲスクハンガタメニ、カ
リニ神トアラハレテ、イササカナル縁ヲモテソレヲタ
ヨリトシテツキニ仏法ニススメイレシメンタメ云々……
(二ノ三)

のときであるが、これも、

今アノー、基礎学力ツテ事で問題になっているよう
な反復修練というようなのは、これは生きた経験じや
ありません。「話しことば」の文型(2)一五九頁)

(沖縄の基地経済の問題について) いまの基地でうるおっ
ているものに見合うところの平和経済ですね、そっ
うものに立て直しということを考えねばならん。また
社会的には基地の中におかれておるところからするこ
ろの、社会的な体質ですね、これらの改善をしていか
ねばならん、こう思うのです。「週刊読売」昭和四十四
年一月三日号。近藤日出造と琉球主席屋良朝苗氏の対談。六

七頁)

のような「話しことば」の型に近似している。「話しこと
ば」におけるこの用法については、「話しことば」の文型
(2)の中に

指示語でくりかえすもの……この同格(指示語でくり
返しをさす「筆者」は非常に多く資料に現われている。

おそらく独話のスタイルの特徴であろう。(同書一五八
頁)

と述べられている。ただ「御文」の例は、おそらく

……コノ三ヶ条ノ篇目ヲモテコレヲ存知セシメテ、自
今已後ソノ成敗ヲイタスベキモノナリ(二ノ三)

一流ノナカニヲイテ、ミナ勸化ヲイタスニソノ不同コ
レアルヒダ……(二ノ三)

の例からうかがわれるように、訓読文体からの移入であろ
うけれども、

……フタゴゴロナキヒトヲ、弥陀ハカナラズ遍照ノ光明
ヲモテソノヒトヲ撰取シテステタマハザルモノナリ。

(二ノ二)

のごときは話線の明瞭化をはかった反復的な用法であっ
て、訓読文における用法からは少しく距離があらう。

尚、代名詞に関連して次のごとき用例が注意される。

抑、開山聖人ノ御一流ニハ、ソレ、信心トイフコトヲ
モテサキトセラレタリ。(二ノ二)

神明トマウスハ、ソレ、仏法ニヲイテ信モナキ衆生ノ
ムナシク地獄ニオチンコトヲカナシミオボシメシテ、
コレヲナニトシテモスクハンガタメニカリニ神トアラ
ハレテ……(二ノ三)

諸仏菩薩トマウスコトハ、ソレ、弥陀如来ノ分身ナレ
バ、十方諸仏ノタメニハ、本師、本仏ナルガユヘニ：
(二ノ三)

のときであるが、これらはすでに指示の機能は失ってい
るようであるし、文頭をはじめる接続詞「ソレ、人間ノ浮
生ナル相ヲツラツラ観ズルニ……」(五ノ十六)における文頭の
「ソレ」の用法のごとき)としてのはたらきでもないようであ
る。これは後世の

イヤ女房はついで子を生まぬ、ソレ、夕霧が死なう五
年前に子を生んだということがあった……(「夕霧七
年忌」貞享元年。「徳川時代言語の研究」による)

に通ずるもののように思われる。そう見ればやはり「話し
ことば」的ということになるう。

(e) 補足的挿入

次に、右の(d)と関連して次の様なものがある。

(珠数をもたぬ人について)⁽¹⁾サリナガラ珠数ヲモタズ
トモ、往生浄土ノタメニハタダ他力ノ信心ヒトツバカ
リナリ、ソレ⁽²⁾(「往生浄土ノタメ」ニハ、サハリアルベ
カラズ。(二ノ五)

⁽¹⁾タマタマ仏法ニアフコトヲエタリトイフトモ自力修行
ノ門ハ、末代ナレバイマノトキハ出離生死ノミチハカ
ナヒガタキアヒダ、弥陀如来ノ本願ニアヒタテマツラ
ズバ、イタヅラゴトナリ。(三ノ四)

右においては傍線(1)と(3)の間に補足的に(2)が挿入せられ
たものと見ることができ。ことに注意したいのは前者の
例(二ノ五)における「ソレ」という指示語の用法である。

この「ソレ」は先の(d)で指摘したと同じ性格のものである
が、話語におけるあり方に非常によく似ている。伊佐早敦
子氏が「はなしことば序」であげておられる次のような
例、

有名な藤村の『小諸なる古城のほとり』にしたって、
はじめははつきりと明星に、⁽¹⁾たしか明星だったと思ひ
ますが、⁽²⁾明星にのせられた時には、⁽³⁾『小諸なる古城の
ほとり』となつております。……

とよく似ている。即ち、挿入句を間にはさんで、前後に
(1)・(3)と同語を反復する。さきの(二ノ五)の例における

「ソレ」も、実は、その前に傍線の末にある「往生淨土ノタメニハ」をくり返して、話線の明瞭化をはかったものである。

現代の「書きことば」で挿入句を入れる場合、次のような形をとることが多い、

九世紀の終りから一〇世紀の初めにかけては、国語史のうえで、重要なひとつの意味を持つ。それまで、学問研究の、いわば閉鎖的な環境のなかで成長して来た平がなや片かなが、この頃に至って、社会的な、^(f) — といつても、貴族階級を中心とする集団に限られようが^(g) — 共有物として、ようやく、実用に供されるようになったのである。(明治書院「日本文法講座四」六三頁から引用)

このような挿入句のつづけ方は「話しことば」においてはおこらない。右の文をそのまま読むのを聴いた場合、傍線(1)から(2)へ移る時に話が通じなくなる。先の(二一五)の例における「ソレ」の補入はそれをさけるためになされたものである。話語の形と見ねばならない。尚、そのような例は、「御文」以外にも存在する、

此間ニ清盛ハ太宰大貳ニテ有ケルガ、熊野詣ヲシタリケル間ニ、コノ事ドモヲバシ出シテ有ケルニ、清盛ハ

イマダ参リツカデ、フタガハノ宿ト云ハタナベノ宿ナリ、ソレニツキタリケルニ、カクリキハシリテ、カカ事京ニ出キタリト告ケレバ、コハイカガセンズルト思ヒ煩ヒテアリケリ。(岩波文庫本一九四頁)

(f) 倒置

南無ト衆生ガ弥陀ニ帰命スレバ」(四ノ八)

マタハ不捨ノ誓益トモコレヲナツクルナリ(三ノ四)

報恩講中ニヲヒテハ一人モノコラズ信心未決ノトモガラハ、心中ヲハバカラズ改悔懺悔ノ心ヲヲコンテ……(四ノ八)

これらにおいては傍線(1)と(2)が普通の国語の語順からみると倒置になっている。この様な倒置の文は枚挙にいとまがない。

さて、さきの(a)・(b)・(c)のごとき不整表現の他に、右の(d)・(e)・(f)のごとき「代名詞の挿入、補足的挿入、倒置」も、「話しことば」に多く現れる構造である。^(g)

以上のようにみると、「御文」の文の「言ひまはし」^(h)の上での特徴を、「話しことば」的な性格のものとして、規定することは許されるであらう。

なおここで、上述の特徴をさらによく知るために、蓮如の消息のうち、個人的書簡と考えられるものを調査してみ

る。「蓮如上人遺文」のうちから五通とり出す。文の長さは次に表示するように平均三二音節程である。

番 号	文長平均	文数
遺文 No. 200	40.66	6
〃 201	38.83	6
〃 210	29.92	14
〃 213	26.06	16
〃 218	25.10	10
総 平 均	32.11	

また文の構造、言いまわしは大体整然としており、不整表現などは認められない。次に例示する。

此方之儀共先雜説之分にて候。乍去ゆだんなく候。御心に入候て承候。千万悦喜申候。次御新発意在京之事前住之時より約束と申、於我等、無余儀事候。但かかんのにしきにて御いたわしく存候。それだにも御かんにん候て候べく候。先目出候。明日より御入候へと承候。心得申候。又、戸びら出来候べき由承候。目出候。諸事期面謁候。恐々敬白。「蓮如上人遺文」第二二三通。専修寺・真慧師あてか）
毎度志共返々ありがたく候。殊今度又千足分返々煩至

候。就其能々信心決定候て報土の往生治定せられ候べく候。人間は老少不定のさかひにて候へば、いそぎいそぎ往生決定の信を得られ候べく候。愚老も七十有余の身にて候へば、旦暮を期せずこそ候へ。いかさま命も候はば、春は見参に入候べく候。あなかしこあなかしこ（第二〇一通。四講中あて）
蓮如の個人的書簡では右のようであるから、前述の(a) (f)のごとき特徴は、蓮如の和文に総じて認められる特性といふことではなく、法話的な「御文」の性格にもとづくものと認められる。

む す び

「御文」の文のあり方、「言いまわし」方を文章史の問題としていくつかの項目に分けて検討してみた。その結果、「御文」の文の「言いまわし」方、あるいは表現の位相を、「話しことば」的なものであると考えた。

ところでこのような「文のなりたち方」における特性は、当然、その中に採用せられる用語と密接な関連をもつはずであるから、次にそれについてふれねばならないのであるが紙数の都合で、いまは割愛する。ただ、総括的にいえば、「御文」の用語は、平安末期以後「話しことば」の

世界から離れていったものとしての「文語」のことばづかいを基調としたものである。しかし、そのような中にも、例えば「二六時中」、「身上^{シニヤウ}」、「油断ナク」、「勿体ナシ」、「歎楽苦痛」(この「歎楽」は病気の意)、「御代官」、「莫大」「酔狂」「論判」「雨山^{フシヤウ}」「当场^{タウバ}ライヒヌケル」等々、中世の用語と考えられる漢語や、「ソノココロイカンゾナレバ」「アラ、ココロエヤスノ他力ノ信心ヤ」のごとき、抄物などにも見られる構文、或は「……ヤラン」「ナニヘントモナキ」「……ナンド」あるいは丁寧語的な「シム^⑤」のごとき中世語としてとりあつかわれるべき表現が豊富に用いられている。それを先の「話しことば」的な文のなりたちの中において考えると、全体として「御文」の文章は、いわゆる「口語的文語」とでもいべき性格のものと考えられる。但し、これは「御文」の文章を当時の「口語文」だといおうとするのではない。それはあくまで室町時代の「文語文」の一つと考える。ただ、それが「口語文」的なところを志向しながら、そうもなり切れず、いわば、口語文と文語文との折衷的文章になっていることに注意したいと思うのである。中世の文章・文体のあり方は多様であって最も口語的なものと、最も文語的なものを両極として、その中間に「ゆれ」があり、そのような「ゆれ」を示す一つの

あり方として、かかる形が存したと考えるのである。そして、このようなあり方は、「御文」が文書による教化、伝導を旨としたものであるというところから生じたものと思われるが、はじめに指摘したように、「御文」のこのような形式は「読みかせる」形式の文、「語り」の文の一つの形を示しているといえよう。

註

- ① 吉沢義則「語脈より観たる日本文学」(昭和二年・新潮社「日本文学講座」一所収)、「国語史概説」(一三〇～一三一頁)その他。最近では築島裕博士「平安時代の漢文訓読語につきての研究」(二六頁以下四〇頁)にその用語についてのくわしい御説がある。
- ② ①に同じ。
- ③ 清水好子氏「物語の文体」(国語・国文十八巻四号) 渡辺実氏「仮名文の初期」(国語・国文二十五巻十一号) 玉上琢弥氏「源氏物語の文章論的研究」(国文学五巻九号)その他。
- ④ 平凡社「日本語の歴史」四巻三三八頁。「国語学辞典」(一八四頁～一八五頁)など参照。
- ⑤ 「蓮如上人遺文」(稲葉昌丸編)六八六頁。
- ⑥ ここに「堺の御坊」とあるのは蓮如が河内の出口を中心に、和泉の堺の信証院などを経廻した時のことで、それは文明八・九年(一四七六～一四七七)のことである。(人物叢書笠原一夫氏「蓮如」二六五頁)。それからすれば、「御文」を読んで「聴かせる」というのは、この頃から後のようにもとれるが、帖内御文の文明五年の条の「聴聞あるべし」など

の記述からすれば、もっと以前からのことと考えられる。

⑦ 「福翁自伝」三六七頁。

⑧ 「文体の科学」(樺島忠夫氏・寿岳章子氏) 一二五頁。

⑨ 伊佐早敦子氏「はなしことば序」(国語・国文二十二の三) など参照。

⑩ 稲葉昌丸編「蓮如上人遺文」解説六七七頁参照。なお同書所収第五通目の御文には末尾に「文明六年三月三日清書之」とある。

⑪ 他に⑨参照。

⑫ なお、中古文の、挿入ということについては、佐伯博士が「上代国語法研究」の中に「はさみこみ」としてあげておられる例における挿入のあり方など参照。

⑬ 「話しことばの文型(2)」二十九頁に大石氏は補足・倒置などを「とくに話しことばに多く現われる構造である」といっておられる。

⑭ ⑨参照。

⑮ 大谷学報(四十四の四)の描稿参照。

⑯ 但し、「文語文」といっても、九〇頁にかかげた蓮如自身のかいた書簡体の文とも明らかに異質である。「ナリ体」の抄物の文などに近いあり方と見る方が正しいであろうか。

付記 拙稿は去る昭和四十年十一月の国語学会大会(広島大学)における研究発表に補筆したものである。

(98頁のつづき)

山梨県立女子短期大学紀要

大和文化研究

山口大学文学会誌

〃 研究論叢

山形女子短期大学紀要

山形大学紀要(人文科学)

〃 (自然科学)

〃 (社会科学)

日本文化(天理大学)

禅文化

実践文学

人文研究(神奈川大学)

人文学(同志社大学)

上智大学外国語学部紀要

〃 英文学と英語学

女子大国文(京都女子大学)

人文科学研究(新潟大学)

人文学報(京都大学)

人文研究(大阪市立大学)

人文論究(神戸商科大学)

〃 (関西学院大学)

二号

十三卷一・二三号

一八卷二号、一九卷一、二号

一七卷マ号

二号

六卷三号

七卷一号

三卷一号

四七・四八号

四八・五一号

三三・三五号

三七・四〇号

一〇〇・一〇八号

二号

四号

四九・五一号

三四・三五号

二五・二六号

二〇卷一・二、二、三

三卷二・四号、四卷一・二、二、三

一八卷三・四号、一九卷一・二、二、三

号